

夏時間的発想

どうもわれわれ日本人は、規則やルールを守るのに裁量とか、融通を利かすということが苦手ようだ。欧米のように、民主主義が成熟する過程で、自由のもたらす弊害を抑制しようと納得して決めた申し合わせとは異なり、わが国のルールは、そもそもお上が有無を言わず押し付けた下知とか呪縛的な命令という、出自の違いに原因があるようだ。

今日でも、明るい日中の時間を有効に活用しようという夏時間採択派の欧米に対して、わが国では昼間の時間が長くなると働く時間が増え、その結果労働加重が健康を害するという後ろ向きの話になる。そのせいで戦後の一時期採択された夏時間は廃止され、漸く昨年あたりから部分的にその良さが見直され、北海道の一部などで再び脚光を浴びている。

欧米では、その良し悪しは別にして、基準・基点でも臨機応変に変更してしまう度量と順応性がある。グリニッジ標準時（GMT）だって、国際的にも経度と時間の基準として認められているにも関わらず、夏時間開始とともにその基準の時間帯（GMT）ですら、大胆に1時間も繰り上げてしまう。そのおかげで普段日照時間の少ない北欧諸国では、時間の有効活用とともに、エネルギー節約に対する国民の関心が頗る高いという。国土の広大なアメリカには、自州の中部時間帯を飛び出て、地勢的有利性から市独自で更に1時間も進めて、ニューヨークの東部時間帯に属したインディアナポリス市のような例もある。

過日石原都知事が、高速道路建設によって昔日の面影を失った、日本橋周辺を復元しようという地元商店街の発案に対して、莫大な経費の無駄であり非現実的であると冷やかに指摘し、代替案として基点である「日本橋」自体を他に移築する奇抜な構想に言及した。懐旧世代には史実と情緒に欠け、容易には受け入れ難いだろうが、建設的ではない情緒主義から視点を換えて、夏時間的発想を検討してみるのも案外無駄ではないのかも知れない。

(近藤)